

このひと

日本分析化学会会長に就任される

小泉 英明 氏

(Hideaki KOIZUMI
(株)日立製作所基礎研究所)

1971年東京大学教養学部基礎科学科卒業、同年日立製作所那珂工場入社。偏光ゼーマン原子吸光法を創出し、1976年東京大学理学博士。日立基礎研究所所長・技師長を経て、現在役員待遇フェロー。科学技術振興機構領域統括・国立環境研究所監事・東京大学先端科学技術研究センター客員教授。原子力委員会・中央教育審議会専門委員。日本神経科学学会・生存科学研究所・International Mind, Brain and Education Society (IMBES) 他理事。2003年ローマ教皇庁科学アカデミー400周年記念会議にて招聘講演。

小泉英明先生の紹介をさせていただくのは、私が適任とは思えないが大変うれしいことである。先生とは、日本分析化学会の会員同志とはいえ、所属の機関も異なり専門も同じではない。しかし、主に学会において話を伺う機会があり、その見識に感服するところが度々あり、本稿を引き受けさせていただいた。したがって、個人的な印象が中心となることをお許しいただきたい。

小泉先生のことが最初に印象に残ったのはゼーマン原子吸光計を開発されたことであった。Prof. Hadeishiの研究室で研究に手を着けられ、日立で開発、商品化されたことは、本会会員にもよく知られている。その優れた性能から世界中で使われている。基礎研究のみならず実用機の開発から商品化に至るまで、指導的役割を果たされた。私の乏しい経験からも原理の追求から商品化まで一貫してリーダーシップを発揮するのは、言うは易く^{やす}実際には実に難しいことである。コンセプトからスタートし安定した商品として完成するには、研究・開発・商品化で1:10:100の努力が必要とはよく言われる。研究者でこのことを、本当に理解している人はあまりいない。さらに実践できる人は極めて稀である。小泉先生は、そのすべてをやり遂げられた。

その後は、磁気共鳴画像(MRI)の分野に移られ、医用の無侵襲撮像法における装置開発を担当された。この分野でも多数の開発チームを指導しつつ画期的な成果をあげられた。ユーザーから偽像であると言われた信号の本質を解明し、磁気共鳴血管造影法の開発に成功された。この方法は現在、脳の血管の状態を見る手段として脳ドックで不可欠の方法となっている。ユーザーのクレームを本質的に解明することで、根本的に新しい方法を創案されたことになり、研究・開発全般に常に目を配っておられてこそ実現した成果であろう。さらに最近、近赤外光を用いる光トポグラフィー法を創案された。脳の活動領域の可視化で脳科学の最前線でユニークなイメージング法として注目されている。これらの成果に対し、大河内記念賞など



数多くの受賞をされている。

小泉先生は、このように先端の分析・計測装置を原理から実用機まで一貫して創案・開発してこられたが、その活躍は狭義の分析化学にとどまらない。とりわけ最近、AAS, MRI, 光トポグラフィーなどの計測手段をはるかに越えて、分析化学の本質論から脳科学の先端分野まで活動領域を広げられている。そのユニークさは、単に最先端を追うのではなく人間の発達過程に注目し、とくに赤ちゃんの時期の重要性に着目されている点にもよく現れている。くわしくは近著「脳は出会いで育つ」(小泉英明・青灯社)に譲るが、実に示唆に富んだ見解を披露されている。感銘を受けるのは、科学の進歩を表面的に追うのではなく、なぜそれが可能になったかを常に念頭におかれているようにみえることで、分析・計測手段を重要で不可欠の要素と位置づけておられる。また、環学性(Trans disciplinary)という概念を提起されている。現実の有効性についての検証もなく学際性を唱える浅い理解ではなく、現場・現実を直視した先生の考察は大変重要に思われ、今後の科学技術行政に重要な示唆を与えるものであろう。日本は、本当の意味で独自性ある力強い科学技術を開発させなければならず、それなくしては生存基盤を失うことさえあり得る。欧米がやるからではなく、日本だからこそ発展させるべき科学技術があり、賢明な科学技術行政が何よりも重視されなければならない。先生の本質をついた考察が有効かと期待される。

小泉英明先生が本会会長に就任されて、日本分析化学会が飛躍的な展開をすることを予感し実現を期待したい。なお先生は、様々の分野に手をつけられるとき、歴史的な視点を重視されているようで、それが科学史の視点からも重要なものがあるように思われることもつけ加えておきたい。また、先生は趣味(?)として乗馬や古武道もなされるとのことであるが、寄らばけとばされ切られるという心配は全くない、厳しいが、実に温和な方であることを付記する。

[国立環境研究所 合志陽一]